

体験活動の有効性について



「生きる力」とは、自ら学び自ら考える力などの「確かな学力」、他人を思いやる心や感動する心などの「豊かな人間性」、たくましく生きるための「健康や体力」の3つの要素からなる力と言われています。

「生きる力」を育むためには、自然体験をはじめとする様々な体験活動が有効であるといわれています。具体的にどのように変化するのか、以下の調査結果をご覧ください。

調査の概要

新潟県野外教育研究会 (NOES) ※①が、新潟県少年自然の家を会場に3泊4日(平成23年8月22日～8月25日)で実施した小中学生キャンプスクールの参加者を対象に「IKR評定用紙(簡易版)」※②を使用し、参加児童・生徒の「生きる力」の変容を調査。

※①新潟県野外教育研究会 (NOES) …大橋正春氏(新潟大学教授)を中心に、新潟県内の野外活動愛好者が集まって組織した団体。県内の子どもたちやアウトドアに興味のある人たちに野外活動や自然体験活動の楽しさを普及することを目的としている。

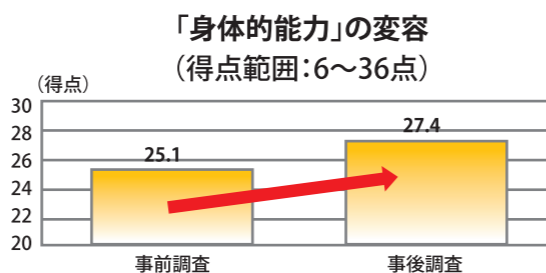
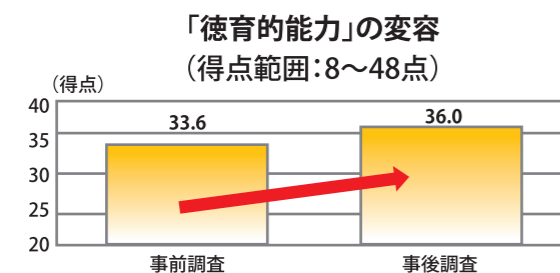
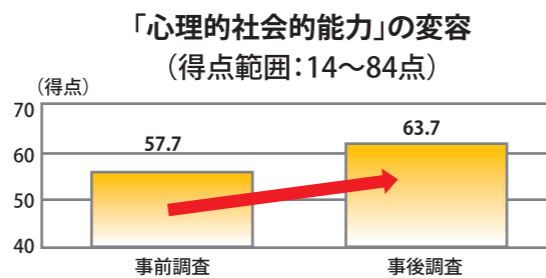
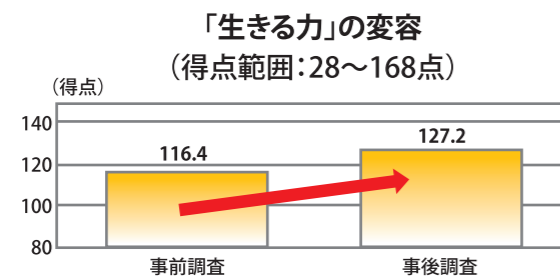
※②「IKR評定用紙(簡易版)」…橘直隆氏(筑波大学大学院教授)と平野吉直氏(信州大学教育学部教授)が開発した「生きる力」を測定するためのIKR評定用紙を28項目に絞り込んだアンケート用紙。

活動内容

	主な活動内容		
1日目	出合いのつどい、オリエンテーリング、野外炊さん(カレーライス)、レクリエーション、班別ミーティング		テント泊
2日目	鳥坂山登山、野外炊さん(焼肉ライス)、きもだめし		テント泊
3日目	カヌー体験、選択プログラム(クラフト)、キャンプファイア		宿舎泊
4日目	ネイチャーゲーム、うどん打ち、別れのつどい		

調査結果

調査の結果、各項目の「事前」と「事後」の得点を比べると、「事前」に比べて「事後」の方が全てにおいて増加していた。また、それぞれに統計的に意味のある差(有意差)が見られた。キャンプを経験したことによって、参加した児童・生徒が友だちとの人間関係をより上手に行うようになり、また自ら積極的な行動が取れるようになるなど、生きる力が向上したことが分かる。



プログラムの作成をするには



体験活動をより良いものにするには、子どもたちの現状を把握し、ねらいに合った活動を行うことが大切です。計画を立てる際には、次の順序で考えてみてください。

目的

- (例)
- 子どもたちの協力する力を育てたい。
 - 子どもたちに先を見通し計画する力を育てたい。



現状

その資質や能力についての子どもたちの現状

- (例)
- 学級活動で協力して一つの活動ができない。
 - 常に指示がないと行動ができない。



目標

その資質や能力についての向上

- (例)
- グループの仲間とともに活動を計画することができる。
 - いろいろな気持ちを仲間と分かち合って自分も相手も大事にすることができる。
 - 協力してものごとを進められるようになる。



教材

どのような活動で育みますか

- (例)
- 野外炊さんを取り入れて、係の作業手順等について十分に指導し、協力する姿を引き出そう!
 - オリエンテーリングで作戦タイムを十分に取って高得点を目指し最後まで精一杯活動に取り組みせよう!



青少年教育施設では、計画作成から相談に乗ります!
思い立ったらご連絡ください。